

佐志小学校の沿革史

(1)明治時代

佐志小学校創立百周年記念式典(野崎敏昭実行委員長、池田鉄治校長)が開催されたのは、昭和51(西暦1976)年2月1日のことです。この式典に併せ発刊された「創立百周年記念誌」と学校に保管されている「学校沿革誌」をもとに、学校の沿革をたどっていきます。

佐志小学校の開校は、明治8(1875)年9月。唐房、浦、鳩川の3村組合立の黒崎小学校と佐志村立の佐志小学校の2校が同時に開校しています。「邑(むら)に不学の戸なく、家に不学の人なからしむを期す」として学制が發布された明治5年からわずか3年後のことです。その後、統合されて現在の佐志小学校へとつながっているため、この時をもって佐志小学校の開校とされています。

黒崎小学校は、現在の黒崎医院附近の民家を借り、教員男2人生徒男42人女4人で、また、佐志小学校は、佐志中通の八幡神社附近に教場を新築し、教員男1人生徒男28人女5人でのスタートでした。

明治12(1879)年、両校は統合され、龍躰小学校となりました。校舎は「龍躰神社」が祭られていた佐志浜町(旧佐志公民館附近)に新設されました。当時はまだ初等科だけの設置で、現在の小学1～4年生までが通学していました。

同15年から約10年間、黒崎小学校と佐志小学校(のち黒崎小学校佐志分校)に分離していた時期がありましたが、同24年9月、再び統合して黒崎小学校と称しました。統合に際し、佐志浜町の岩山を切り開いて校舎が新設されました。現在の瀧福寺下(旧佐志郵便局附近)です。打上、呼子に通じる道路もこの頃にできたそうです。

同26(1893)年9月、高等科が設置され、現在と同じ小学6年生までが通う黒崎尋常小学校となりました。周辺の村々に先駆けて高等科が置かれたことや、通学の利便性などの理由により、同年12月、湊村、打上村、有浦村、切木村から委託を受け、八床、菖蒲、岩野、加倉地区の高等科の児童を受け入れています。この措置は15年間続いています。

明治40(1907)年の小学校令の一部改正により、尋常小学校が4年から6年に延長、高等小学校はその後2年間となりました。黒崎尋常高等小学校もそれに従い、現在の小中学校を併せた学校として、戦後まで続くこととなります。

(2)大正～昭和時代初期

大正3(1914)年4月、枝去木に分教場(のちの分校)ができました。枝去木地区の児童については、それまでいく度か通学区の変遷がありました。明治34(1901)年、1～4年生が打上村立岩野尋常小学校と切木村立大良尋常小学校に分かれて通学し、高等科まで進む児童は打上尋常高等小学校へ通うことになりました。その後、同41年、枝去木地区は全て打上尋常高等小学校の校区となりますが、同44年、再び黒崎尋常小学校校区に戻ります。分教場のできた大正3年からしばらくは、尋常科3年まで分教場、4年から本校に通学しましたが、昭和10(1935)年に尋常科4年までが分教場で5年から本校となりました。そして、昭和54(1979)年3月に廃校となるまで、枝去木分校は65年間の歴史を刻みました。

昭和11(1936)年と同13年の2回の海岸埋立工事により、学校の敷地面積は工事前の8千㎡から2万㎡にまで広がりました。大正10(1921)年に698人だった児童

数も、20年後の昭和16（1941）年には初めて千人を超え1,070人となっています。1学年3学級と分校2学級の計20学級。教室は50～60人の児童であふれていたそうです。

この昭和16年4月は、佐志町立佐志国民学校と校名が変更になった年でもあります。そして、同年11月3日、佐志町と唐津市の合併により唐津市立となりました。1か月後にはハワイ真珠湾攻撃が行われています。日本が太平洋戦争へと突入していった時代でした。

(3)戦後～平成時代

終戦から2年後の昭和22（1947）年3月、新憲法のもと教育基本法、学校教育法が施行され、小学校6年、中学校3年の9年間が義務教育期間と定められました。これに従い、同年4月、唐津市立佐志小学校と改称、高等科は分離して佐志中学校の前身、唐津市立第二中学校となりました。

昭和26（1951）年10月のルース台風で運動場護岸堤防が決壊し、敷地5百坪を失いました。また、同28年6月、北部九州を襲った豪雨により校区内も多くの被害を受け、6日間の休校措置を取っています。学校も玄関前に1.8mもの土砂が堆積したそうです。

その後、新校舎建設工事が始まり、同30（1955）年9月に落成記念式典が開かれました。同36年12月、給食室が完成し給食が始まりました。同38年、校歌制定。同41年、枝去木分校改築落成。同43年校旗制定。同44年12月、講堂を解体し屋内運動場が完成。同51年の開校百周年記念式典を迎えることとなります。

同53年の新校舎落成に際しては、新しい教育の方向性を考えた施設設備の工夫がされ、特に視聴覚室やスタジオ、新型学習機器（シンクロファクス）を備えた学習室などの充実が目を引きます。各教室にもテレビ、OHP、ラジカセが置かれ、教育放送や映像・音声教材を活用した教育が盛んに行われていました。

同59（1983）年、金子財団より金管楽器一式の寄贈を受け、金管クラブの活動も始まりました。運動会では、鼓笛隊に金管バンドが加わる華やかな鼓笛パレードが披露されるようになりました。また、同60年には全日本健康優良校、平成6（1994）年には日本水泳連盟全国表彰を受賞しています。

昭和時代は児童数がとても多い時代でした。昭和33（1958）年の1,450人をピークに、千人を超える時代が同42年まで続きます。一時は700人台にまで減少しますが、昭和53年から62年までの10年間は、また児童数が800人を超えていました。学級数が最大となったのは、同56年の30学級です。

平成時代は、心の教育や人権教育に熱心に取り組まれています。平成7（1995）年に文部省・佐賀県指定の同和教育研究発表会、同9年青少年赤十字加盟校、同12年に心の教育推進事業、同27（2015）年から2年間青少年赤十字防災教育モデル校として取り組まれてきました。

19台のパソコンが配備されたパソコン教室ができたのも平成7年です。校舎の耐震工事と併せた大規模改修工事は同20年12月に終わりました。同時に学校給食は、鎮西給食センターからの配食となりました。同22年にプール、同27年に体育館がそれぞれ新しくなりました。開校150周年を迎えるのは、平成37（2025）年のことです。

※平成30年3月31日発行「佐志の歴史」に寄稿（文責 原口毅）